

## 朝鮮語研究最前線

### —対馬宗家文庫ハングル書簡の発見—



海外交流

岸田文隆\*

From the Forefront of Korean Studies  
—Discovery of the Hangul letters in Tsushima Souke Bunko—

Key Words : Tsushima Souke Document, Hangul Letter, Japanese Interpreter in Korean,  
Korean Interpreter in Japan

#### はじめに

筆者は、本誌第64巻第3号において、大阪大学外国語学部外国語学科朝鮮語専攻の紹介をおこない、教育面での海外交流、すなわち学生の交換留学に言及したが、今回は、我が専攻の教員がおこなっている研究上の海外交流について述べてみたい。すなわち、対馬歴史民俗資料館の宗家文庫の中から新たに発見された近世期のハングル書簡を対象とした日韓の共同研究である。

江戸時代、日朝間の外交の現場において、意思疎通・情報伝達は多くの場合朝鮮語によってなされたと推測されるが、その際実際にどのような朝鮮語がやりとりされていたのかを具体的に示す資料はさほど多くはない。それは、コミュニケーションの手段たる朝鮮語自体はほとんど記録されることなく、朝鮮語を介して得られた情報だけが和文や漢文で記録されたからである。わずかながら伝わっている朝鮮語の資料には、吏読<sup>りどく</sup>と呼ばれる漢字の借字表記によるものと、ハングルによるものがあるが、とくに後者は現存すること極めてまれである。ときに二次資料として、記録類にハングル文書の写しが収録されることもあるが（たとえば、韓国国史編纂委員会所蔵の対馬宗家文書〔記録類4533〕「分類紀事大綱」第3期6冊には、癸酉（1753）6月7日に朝鮮の商人たちが裁判多田主計に差し出したハングルの書付

の写しが収録されている）、実物については、長正統（1978）によって紹介された対馬歴史民俗資料館の宗家文庫の8通の倭学訳官のハングル書簡が知られているにすぎなかった。

長正統（1978）によって8通のハングル書簡が紹介されたことにより、対馬宗家文庫にその他にもまだ知られていないハングル書簡が存在するのではないかとの推測は容易になされたが、不幸にもその後資料の発掘は進展しなかった。それは、それらハングル書簡が対馬宗家文庫の4万点に及ぶ一紙物資料の中に未整理のまま埋没していたため、実質的に閲覧調査が不可能であったためである。

ところで、2009年に、対馬宗家文庫の一紙物が整理され、目録（対馬歴史民俗資料館編（2009）、対馬歴史民俗資料館編（2012））が上梓されるにおよび、これら資料をめぐる状況は一変した。従来知られていなかったハングル書簡類の存在が明らかとなり、その閲覧調査が可能となったのである。対馬歴史民俗資料館編（2009）の「解題」p.466には、次のようにある。

「特異なものといえばハングルで書かれた訳官書状が150通ほどある。そのうち16通（8通のまがい：引用者）についてはかつて長正統氏が紹介されたがなお100余通残存しているのである。」

この「解題」にある「150通」というのが実数とどれほど隔たりがあるのかについては、さらに詳しい調査をおこなう必要があったが、その後の共同研究により、長正統（1978）によって紹介された8通を含めて、総112通であることが確認された。

#### 日韓の共同研究

2009年の一紙物目録の刊行によりハングル書簡の存在を知った筆者は、早速資料の収集・分析に着手した。また、朝鮮語学の立場から日本と韓国の研



\* Fumitaka KISHIDA

1960年4月生まれ  
京都大学大学院 文学研究科 言語学専攻  
攻博士後期課程 単位取得退学（1991年）  
現在、大阪大学大学院 言語文化研究科  
言語社会専攻 教授 文学修士  
朝鮮語学  
TEL : 072-730-5198  
FAX : 072-730-5198  
E-mail : fkishid@lang.osaka-u.ac.jp

研究者による共同研究を立ち上げたが、幸いに2012年度より科学研究費の採択を受けた（JSPS 科研費JP24320078）。そのメンバーは、本学朝鮮語専攻の小西敏夫、酒井裕美准教授をはじめとして、日本国内の朴真完京都産業大学教授、横山恭子富山高等専門学校助教、許秀美龍谷大学講師、さらに韓国の金周弼国民大学教授、黄文煥韓国学中央研究院教授、鄭丞恵水原女子大学副教授、金徳珍光州教育大学教授、権洙用韓国学湖南振興院責任研究員の諸氏を加えたものであるが、とくにハングル書簡（諺簡）の研究に造詣の深い金周弼、黄文煥の両氏によって本資料の第一次翻刻がなされ、極めて有利な条件のもとで研究を開始することができたことは幸運であった。さらに、2013年度からは長崎県立対馬歴史民俗資料館の主管する「宗家文書朝鮮書簡調査事業」（調査委員長：松原孝俊）が開始され、筆者らもそのメンバーに加わることとなり、資料収集・調査の徹底を図ることが可能となった。「宗家文書朝鮮書簡調査事業」の2年間の研究成果は、2015年3月刊『対馬宗家文書史料朝鮮訳官発給ハングル書簡調査報告書』に結実し、この貴重なる新資料が広く研究者一



写真：韓国国立ハングル博物館での学術会議の光景

般に知られる契機を提供した。また、同年9月には、金周弼国民大学教授等の尽力により、韓国ソウルの国立ハングル博物館において、このハングル書簡類を対象とした日韓の国際学術会議が開催され（写真）、韓国においても学界の関心事となった。

さらに、2015年の報告書を土台とし、その後3年間の改訂作業を経て、改めて世に問うたのが、松原孝俊・他（2018）であるが、該書は、全112通のハングル書簡類につき写真・翻刻・和訳・解説を付したもので、日本史学・朝鮮史学・朝鮮語学などの研究者に今後大いに利用されることを期待している。

### おわりに：朝鮮通信使研究の新展開

最後に、これらハングル書簡の持つ研究上の価値について言及しておきたい。

今回発見された百余通のハングル書簡は、その大半が、いわゆる朝鮮通信使の易地行聘交渉に関わるものである。最後の朝鮮通信使となった1811年の朝鮮通信使は、それまでの江戸城ではなく、対馬で国書交換儀礼等をおこなうよう変更されたものであったが、その交渉は難航をきわめ、24年の年月が費やされた。これらハングル書簡は、交渉の最前線で折衝に奔走した対馬藩朝鮮語通詞・小田幾五郎と朝鮮の倭学訳官（日本語通訳官）らとの間でやりとりされた書簡類であり、19世紀の日朝間の最大級の懸案であった外交交渉の舞台裏の実際を如実に伝えるものである。

朝鮮通信使の対馬易地行聘に関する従来の研究では、朝鮮通信使易地行聘は、朝鮮政府の反対を顧みず、対馬藩が朝鮮の倭学訳官を抱き込んで強引に押し進めたものとされてきた。それは、従来の研究が、おもに朝鮮政府が編纂した史料に依拠してなされてきたためである。本ハングル書簡は、交渉の最前線で当事者たちがやりとりしたものであるが、そこからは、易地行聘を可とする朝鮮朝廷の意向も見えてくる。また、易地行聘交渉のさなかの1805年に、倭学訳官崔瑠（伯玉）は受賄売国の咎により釜山の倭館前で処刑されたが、本ハングル書簡には、その処刑の2か月前に流配先の全羅道長興府から倭館の朝鮮語大通詞の小田幾五郎に宛てて秘密裡に送った衝撃的な書簡も含まれており、そこからは、奸訳としてしか描かれない朝鮮側の官撰の記録とは異なった一面をうかがうことができる。本ハングル書簡か

ら描かれる朝鮮通信使の対馬易地行聘交渉は、対馬藩朝鮮語通詞と朝鮮の倭学訳官との信頼関係・交流であり、概して対馬藩は朝鮮の倭学訳官らのお膳立てに沿って交渉を推し進めたことがわかる。本ハンゲル資料が、朝鮮通信使研究に新たな局面を提供する重要資料であることを疑わない。今後、本ハンゲル書簡を利用して、朝鮮通信使研究がさらに発展していくことを願う次第である。

### 参考文献

長正統 (1978) 「倭学訳官書簡よりみた易地行聘交渉」『史淵』115, 95-131. 九州大学文学部  
対馬歴史民俗資料館編 (2009) 『対馬宗家文庫史料一紙物目録』(1)～(3), 長崎県教育委員会

対馬歴史民俗資料館編 (2012) 『対馬宗家文庫史料絵図類等目録』, 長崎県教育委員会

対馬歴史民俗資料館編 (2015) 『対馬宗家文庫史料朝鮮訳官発給ハンゲル書簡調査報告書』, 長崎県教育委員会

松原孝俊・岸田文隆・北川英一・許秀美・金京美・金周弼・金徳珍・金東哲・権洙用・黄文煥・小西敏夫・酒井裕美・酒井雅代・趙燭熙・鄭丞恵・中野等・藤川貴仁・古川祐貴・朴真完・山口華代・横山恭子・四辻義仁・梁興淑 (2018) 『朝鮮通信使易地聘礼交渉の舞台裏—対馬宗家文庫ハンゲル書簡から読み解く』(九州大学韓国研究センター叢書3) 九州大学出版会

